
天使と絵描き

郁也門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と絵描き

【Nコード】

N9152V

【作者名】

郁也門

【あらすじ】



絵を描くしか能のない青年がいた。何事もせわしなく、無機質で、テンポの早い世の中に、彼は疲れていた。

思い出の街があった。そこは非現実的なファンタジーの匂いと、ノスタルジーのもやがかかっている、郷愁と感傷の世界だった。

天使が居た。どこかひどく懐かしくて、大切に、……青年の絵描きの道をあきらめさせる存在。それが彼女だった。

——いつもそうだった。僕と言うちっぽけな存在は、ただ幸せに生

きたいだけだと言うのに。僕の心が弱くて、勝手に擦り切れてしま
うのだろうか。それとも――。

◆…青年は自分の絵をあきらめるために、思い出の街で絵を描く。
街人は、心に向き合うために、絵を求める。天使は、ただそれを見
守る。

思い出の世界が終わる前に。

魔法と機械とファンタジーの世界の忘れ物、小さな物語。

◆◆描写…三人称（青年）と一人称（僕、自分）の混在あり。

語り手…青年視点の第三者。語り手による青年の心情描写あり。

段落構成…段落ごとに1文字空白あり。主に1回の場面転換で1段
落。段落中にも改行あり。会話文章の「」による空白のキャンセル
あり。

記号解説…

……|| 時間的空白。

――|| 心情的空白、心情描写。

構文解説…主に「副詞節↓主節」形式。

テーマ…感傷とファンタジー。

思い出の街

乾いた呼び鈴の音がした。埃のような匂いがむつとする。青年はこの小さな店の入り口から、奥にいる人影へと顔を向けた。

「おお、よう来なさった」

人のよさそうな老人が、レンズを磨きながら青年を見上げる。白く膨らんだひげの下から、かろうじてその黄色い歯が見える。

老人は両手を広げて、こちらに来るように、と催促した。青年はそのまま老人に促されて歩いた。

連れられたのは彼の物と思しき工房だった。ガラス製品がいくつも並んでいる。物々しい機械や設計図、油の匂い、窓からさす朝日とそれに照らされる埃、それら全てが相まって、一つの幻想的な世界を作り出していた。

懐かしい香りがする。胸を締め付けるような郷愁の念。先ほどかraitたいほど味わっている感傷が、口に広がったのどを、声を、胸を詰まらせる。

ただ、ひどく懐かしくて。せりあがる気持ちを前に青年の胸は早鐘を打った。

「実はお尋ねしたい事がありました」

青年は迫る感情に耐えかねて口を開いた。

「よう分かつとる」

老人はまず、落ち着いた声で青年をいすに座らせた。そのまま奥からコーヒー豆を持ち出し、「豆をすりつぶしている。」

「お前さんは、この世界に新しくきた客人だ」

「僕が、客人」

豆を砕く音が続く。水が火にかけられて、しゅんしゅん音を立てる。

「そうだ。この世界に來たということは、そういうことだ」

「……」

こぼこぼと注ぐ音が聞こえてきた。顔を上げると、ごとりと、と硬質な音を立てながらコーヒーが置かれた。やけに早い。

「ああ、これは予めコーヒー豆を煮出しておいたやつを暖めたのさ。さっき作ったのは次の奴だね。――何事も、年を取ると億劫になるのさ」

老人はこちらをまっすぐ見据えたまま、しみじみ言った。その瞳の、曇らないガラスを青年は見た。

思い出の街。

表通りの花屋さんを眺めながら、青年は老人の言葉を思い返していた。人のよさそうな笑顔を振りまく彼女は、時折その西洋風のスカートを揺らしては、客を捕らえて他愛無い話を繰り広げる。

受け答える紳士は、ならばひとつ、と花を一輪だけ購入する。

白い土壁で出来た街角で交わされた二人のやりとりは、どこか幻想めいていて、絵本の世界のようなだった。

「――ここは、人が痛みを忘れるための場所。現実から遠く離れた、人々の安らぎの地さ」

あの丸くて親しみを覚える老人が、指を遊ばせていた。彼のかすれた呟きを、青年は聞き逃さないようにした。

「当然わしも、この世界に來てずいぶんとたつ。現実はどうなってるかな」

そろそろロマンスグレーも曲がり角だろう。老人は、コーヒーを啜って尋ねた。

「相変わらず不景気です」

青年の言葉に、老人は「いいジョークだ」と豪快にふきだした。

「不景気か。景気なんてこっちに来て以来、気にしたことなかったなあ」

確認するように、そう言つて。

「――お兄さん、あなたもお一ついかがです？」

気がつけば、花屋の女性がこちらをのぞきこんでいた。

「あ、僕は結構です。お金が無いもので」

慌てて取り繕う。花を買つてゐる場合ではなかったのだ。油断すると涙が出てきそうだ。

そつけない青年の答えに、一瞬女性は面食らつたようだ。しかし、思い当たる節があるのか、すぐに笑顔になり。

「あらあら、お花を買うお金も無いなんて。さては貴方こっちに着たばかりでしょう？」

口角を持ち上げて、そう問いかけてくる花屋。

「ええ、実はそうでした」

「じゃあサービスしましょう」

言うや否や、適当なものを見繕つて、そのまま一つのブーケにする彼女。青年はあわてて制止しようとしたが、いいのいいの、とやんわり宥められた。

「お代は結構。次からはご贔屓にね？」

笑顔と一緒に、花を手渡して。

街を見渡す。

広場まで歩いてきて、分かったことは少ない。全体的に白い土壁で出来たノスタルジックな街並みは、何も青年に語りかけない。

石を敷き詰めた街通りは、誰かが掃除をしてゐるのか、ごみが少ない。おかげで彼に入ってくる情報も少ない。

そして何より、ここには時計もカレンダーも無い。時間や日付か

ら何か分かるかもしれないが、そういうものが見当たらないのでは手がかりが無い。

ひょっとすると、と期待した新聞も、いつの時代だか分からないような古ぼけた記事を写している。

この街全体が泡のようだ。ふとそんな言葉が青年に思い浮かぶ。ちよつと突付けば崩れてしまいそうな、何かがあふれ出てきそうな。そんな痛みがこの街に疼いている。この街の隅から隅まで、触られたくない古傷が互いを慰めあって、溶け合っている。

彼は、ぼんやりと街の噴水の縁に腰掛けていた。

――優しくされる道理なんて無いのに。僕は決して不幸じゃないのに。

優しさが、緩んだ涙腺を刺激する。ここまで優しくされたら、自分の痛みもこの郷愁の香りに溶け出てしまいそうで。

しばらくの間青年は自分の心のありかを忘れていた。

「――お待たせしました」

自分にかけられた声なのだろうか、とふと思って青年は見上げた。その声がどんな声なのか一瞬忘れるほどに、彼女の外見は印象的だった。柔らかな声だったろうか。

天使が居た。波打った金色の髪は、腰まで届いていて、羽から洩れる光は、透き通る雪とポリエステルを足して二で割ったような硬さを思わせる。肌は細く、表情は綿のようだ。

――光がにじんで、きれいだ。

青年は息を呑んだ。目の前の天使は、柔らかな光をたたえている。しかし、その外見に青年は感じるはずのない感情を覚えている。この街に来たときから、ずっと引きずっている感情だ。

このままでは無礼だろうと思った青年は、無理やり意識を彼女からはがして、腰を浮かせて挨拶を交わした。

「はじめまして」

「はじめまして」

はじめまして。

こんなにも懐かしいのに。

「――貴方が望む限り、この世界は貴方を受け入れるでしょう」

とあるアパートの一角、天使は歌うように言った。

面白い事に、この世界にもラジオや冷蔵庫があるようで、トイレまで水洗式である。

「僕の望む限り、ですか」

カンバスを足に乗せて、青年は確認する。このカンバスは、彼女からもらったものだ。

「ここの世界は、誰もが誰にも優しい世界でも、誰も優しくない世界でもあります。癒しの地ではありません」

ベッドに佇んだまま、天使は念を押す。青年は隣で、部屋全体を見回しながら、彼女の言葉に耳を傾ける。あの老人の言葉とは随分ニュアンスが違う。

「……」

「ここは皆さんの思い出を集めた場所です」

「思い出」

青年は静かにつぶやいた。――天使もまた、思い出なのだろうか。

こんなに懐かしいこの世界は、だれかの思い出なのだ。こんなに優しい世界を知ってるやつは、幸せ者だ。

幸せなやつだった。青年は自嘲するような目つきになった。

僕はなんて幸せだったのだろう。僕に優しくしてくれるなんて。思い出はいつだって優しい。

そう、こんなに幸せだったのに、今の僕は擦り切れた幸せを握って嘆いてる――。

決して他の奴より不幸せだというわけじゃないのに。僕は自分に甘いのだろうか。僕の心は弱いのだろうか。

青年の沈黙を見計らって、天使は口を開いた。

「この世界に時計が無いのは、現実世界と時間がつながっていないからなんです」

――それはどういうことですか？

「つまり、貴方が帰るときに、元の世界になんら迷惑がかからないようにしてあるのです」

――だから、好きなだけこの世界にいられる訳ですか。

「そうです。ですが、ルールが一つ存在します」

――ルール？

「ええ。貴方には絵を諦めてもらいます」

――。

「思い出しましたか。貴方は絵を描けなくなっただんです」

「――ああ、」

――そうでしたね。そうですとも。

青年は自分の指を見た。

――利き指は、もう動かないんだった。

ぼんやりと、両手の指で、握って広げる事を繰り返す青年。

死ぬほどつらい、わけではない。

「――どうにかなさいました？」

おずおずと天使は聞いてきた。顔が近いので、その鼻立ちがはっきり見える。

端整で柔らかい彼女の顔に、不安のかげりが微かに見て取れた。急に黙ったためだろう。

「いえ、何でも」

青年は形式上そう答えることにした。しかし、その態度がいつそう彼女の罪悪感を引き立てているようであった。

「……あの、つらいでしょうけれども」

「いえいえ」

青年は、彼女の言葉を途中で折って、笑顔を見せる。天使はそのときちょっとだけ驚いたように――顔が近いのを自覚したのだろうか――顔をひいて座りなおした。

そんなことを気にせずに、青年は返事を続けた。――守りたい物があつたから。

「僕は気にしてませんよ。安いものです」

この言葉話す僕は、どんな顔をしていたのだろうか。満足していただろうか。

言葉とは裏腹に、青年の心は曖昧なままであつた。

二人でアパートの鍵を借りにいったとき、管理人は変な顔をせずにもそのまま二人の手続きをしたようだ。

今日からさっきの部屋が青年の部屋となる。いつに帰れるのかも分からない。

アパートの鍵を管理人から受け取ってしばらく、青年は考え込んでいた。

この世界はノスタルジーの匂いがする。でも、そこには到底ノスタルジーでは語りえないような世界がある。

街行く人は、小石をはじくゲームに興じている子供や、酒と汗と土の匂いのする炭坑夫、なまめかしい娼婦、紳士、そしてローブを

引きずる魔法使い。

小綺麗なバーテンダー、おどけた動物、陽気な植物、恋するアンドロイド。

——なんてアンバランスなんだろう。

青年は思わず嘆息した。この世界は何一つ整合性が無い。西洋めいたノスタルジーの世界では無い。

——でも、この世界はどこと無く幻想的で、絵本のような世界だ。

目の前の光景——風船を配る、顔だけウサギのお兄さん——をみて、青年はそう考える。

色とりどりの風船を抱えて、うれしそうに走る少年。トランクから鮮やかな花を取り出して、街行く人に配るピエロ。

——なんて懐かしい世界なんだ。

あるはずも無いこの世界への郷愁に、青年は胸がつぶれそうになった。

「——思い出の街だからな」

ガラス細工の老人の言葉がよみがえる。

「お前さんが最初に感じた懐かしさも、この世界がお前さんにそう思わせるのさ」

「そうですか」

つぶらな瞳をたたえた老人は、コーヒーを片付けながら、話を続ける。

「わしもエルフなんざに懐かしさなんか感じはしめえ。でもな、懐かしいんだ」

「……ようやく僕が感じた違和感に説明がつきます」

「懐かしいんだ」

ひどく疲れたような言葉は、おおよそ目の前の老人の言葉とは思えなかった。

——子供のような、年寄りのような言葉だ。

懐かしいという言葉が、そのまま心につつかえた。老人のあのビ

ロードの瞳が僕を見つめる――。

あのビロードは、世のキタナイ物を見通してきたのだろうか。

青年はそのまま街並みを通り過ぎる。ビロードの影が青年にちらつく。老人のやり取りで、何かを思い出しかけたが、それが出てこない。

青年は気を紛らわすために、景色を眺めることにした。
街中の白い壁にたくさん張ってあるポスターも、雑多な種類がある。

ポスターに描かれているのは、時の王様の似顔絵、宇宙飛行士の絵、ブランド商品の広告、コンサートの宣伝。

――どこの世界も変わらないものだ。

思わずその不ぞろいさに苦笑する青年。本当に雑多だ。いろんなものがあふれていて、騒がしいにおいがする絵の配置だ。

しかし、ふと。

青年は足を止めた。思わず目が開く。

『僕の絵を見て。』

慟哭をつづった、荒々しい血の色。暴力的なまでに青年の心に刺さる。

何かを渴望するような、生き血を啜る獣の匂いがポスターからあふれている。

灰色の背景、血のくすんだ匂い、傷を疼かせる景色、色あせたカ
ンバス、悲しみを押し殺した埃の匂い、廃れて、踏み潰された跡。
雨風に野ざらしにされた屈辱、激しい慟哭、ばきばきと音を立て
て折られていく心、痛ましい慟哭、張り裂けそうな感情を汚く覆い
隠すかさぶた、頭を打ちつけたくなるような慟哭、誰にも見てほし
くない、誰かに見てほしい、渴望に飢えに飢えた慟哭、情欲と狂気

を織り交ぜて僕の、貴方の、独りぼっちの胸を激しく打つ、慟哭。
狂気。慟哭。泣き喚く。慟哭。引っこく傷跡。慟哭。ビルの景色。
慟哭。影が伸びて、僕を覆い隠す。慟哭。首を誰かが締める。

情欲。汚い。キタナイ。お前は汚い。慟哭だなんて、汚い。

僕が汚い。貴方が汚い。お前が汚い。お前が汚い。お前が汚い。

お前が汚いんだ。

僕は悪く無い。早く僕を見て。僕の絵を見て。僕は知ってる。見て。見て。見て。

絵を見て。慟哭。早く。焦燥。そうじゃないと。渴望。僕は飢える。哀願。

唇が乾く。目は悲しみをたたえる。葉の匂いがする。ここは僕の痛みです。おいしいですね。人の不幸。

僕は小さい。悪でも無い。汚いだけだ。汚いだけです。
妬ましい。幸せが妬ましい。成功。ずるい。

笑って。嘲って。笑って。笑ってててて、ててて、ててて。

かつての僕だ。かつての僕だ。僕だ。ぼくだぼくだ。
ぼくがいる。ぼくがいる。ぼくがいる。

「僕の絵を見て、か」

。

。

。

――。

「……僕は絵をやめるんだ」

『ええ。貴方には絵を諦めてもらいます』

――天使、君は……

「僕は、絵をやめるんだ」

二度目の言葉は、言い聞かせるような力強さだった。

焼けた部屋、1

喫茶店をぼんやりと眺めて、青年はため息を吐いた。

日光は柔らかにふりそそいで、街の中を点々と彩る緑を照らす。つややかな緑は、そばのぼんやり白い壁に映えて見える。

石畳の石英が粒のようにきらめく。そよ風にまたたく朝のふやけた日差しは、太陽が遠い事を教えてくれる。まっすぐなのに、まぶしいのに、柔らかく輝いている。

活気に満ち溢れる昼の予感が、街に降り注いでくる。

青年はただ一人、その様子に心を奪われていた。朝の光景の移ろいゆく様子を眺めているだけで、心が解け出てしまいそうなくらいだ。この空気は、僕の心に毒だ。きゅう、としめつける懐かしさが、ありもしないこの世界への思い出をまさぐって、僕の割れやすい心を破片へとほぐしていく――。

お客さん、ぼんやりして貰っちゃ困りますよ。

給仕服の壮年の男に声をかけられて、青年は我に帰った。慌てたようにカンバスをひったくると、彼は頭を下げた。

胡散臭そうな顔をしつつも、次々テーブル拭きを進める男性を見て、青年は足を進ませた。

――また、叱られてしまった。

その事実が、現実世界の青年のあり方と重なって、気持ちが暗くなった。

世界が変わっても、僕は根本的に変わらないものらしい。

「どうかしました?」

いや、別に、と噴水のそばでカンバスを眺めたままの青年。

興味深そうに覗き込んでくるのは、利発そうな少女。長いスカートのしたから、ボロボロの靴が顔を覗かせる。彼女の編みこんだ髪が揺れて、青年の腕をなぞる。

何も描かれていないキャンバスを見た彼女は、得意げにたずねてくる。

「へえ、絵描きさんですか」

「廃業寸前のね」

そう、廃業寸前。青年は彼女に明るく答えるように、暗に自分へ言い聞かせるように、おどけて言った。

「これから何を描くんですか？」

噴水の飛沫が視界の淵できらめいている。少女の長いまつげが自己主張をしている。この目は、興味を引き付けられた目だ。

良く知っている目だ。昔の自分も、こんな目をしていただろうか――。

「これから、何を描こうかな」

やっぱりおどけるような言葉が出てくる。青年はまじめな答えを避けた。

いっぱい、いっぱいの物を書き殴りたかった。今のうちにたくさん物を描いて、満足したかった。

そんなことしても、満足なんてするはず無いのに。もっと後悔するはずなのに、もっと惨めになるはずなのに――。

溢れる未練と、もっと高みを見たいという願いが、青年を突き動かす。そんなことは、火を見るよりも明らかなのに。

指が筆をつかんだ。――『僕の絵を見て。』

もっと、僕が僕の絵を見なくてはならない。そんな確信がどこかに宿る。

無造作にパレットを開いては、そこに色をとる。噴水から失敬し

た水をコップに注いで、筆先を湿らす。色を微かに突付く。

色と色と、色と水とが混ざり合って色を作る。

薄く展ばした水彩の色は、カンバスをそっと滑って、いくつもの透明な膜を重ねていく。

次第に影が出来上がり、次第に色に命が生まれる。

色の重なり合いは、決して互いに混ざり合うことなく、まるでカラーフィルム越しに白い空を眺めているかのような透明さをカンバスに残していく。

透き通っているのに、みずみずしいつやと、深い色の見えない影が、吸い込まれるように黒い。

潤んでいる間は浮き上がって見えた絵の具が、乾いてからカンバスに影を落とす。

カンバスの奥が何も無い真っ白だったなんて、いまさら誰が信じるのだろう。

「――」

少女は瞬きを忘れて見入っていた。青年もまた、絵に見入っていた。いや、絵の世界に没頭していた。

細かくぼやけた部分は、青年が指でなぞって、色をくすませる。コントラストのはっきりした部分は、何度も何度もカーブを描いて色の濃い部分をカーブの淵に追い出そうと追い出そうとして、濃淡の差を付ける。

カンバスの中の太陽の白さが、周りの色をはっきりと照らし、見ているこちらにもまぶしい。

全部透き通っている色なのに、深く折り重なった色。

決して色の複雑な混ぜこぜ合いには表現できない、本当の深遠な色が、そのカンバスを見るものの心を奪っていくのだ。

「――すごい」

「……そうかい？」

油絵には無い、全ての色のグラデーションが全てを映し出す世界。奥の色も薄く透けるようで、でもその色は見るものの目には届かず、ただ景色として胸に染みこむのみ。

少女はやっとの事で、すごい、ともう一言だけしゃべった。同じ言葉しか呟けないかのように、呆けて魅入っている。

「だって、こんなに絵が描けるなんて」

「それは、絵描きだからね」

青年は例に漏れず、おどけた青年を演じた。

「これはプレゼントにしよう」

「え、でも……」

少女はたじろいってしまった。突然こんなプレゼントを渡されても、私は何もできない。これは絵を描いた青年のものだ。彼女そう言わんばかりだった。

しかし、青年は相も変わらず、のりくらりと彼女の無言の言葉を避ける。ゆっくりした手つきで絵の道具を片付けては、またぶらりと出かけて行きそうな様子だ。

無性にこの絵を描きたくなっただけなのだ。こんな絵が描きたかったのだ。描けたのだから、何も思い残すことはない。

「……私、お金なんか持ってませんよ」

ぽつりと少女はつぶやいた。でも、青年は構わないさ、とだけ返した。この絵は少女のために描いた絵じゃない。僕の心を写したままで。

今なら花屋の女性の気持ちが分からないでもない。親切は自分の心を洗うためのものだ。

「御代はサービスさ、また今後ご贔屓に頼むよ」

笑顔を作れる。

焼けた部屋、2

「騒がしいな」

青年が喧騒に気が付いたのは、街の中をしばらく歩いてからだった。ざわめきだった人の群れに、青年は胸騒ぎを覚えた。街行く人々のものめずらしい顔つきが気になった。

確か、自分の借りたアパートはこっちの方向だったはずだ――。

人だかりの方へと足が向かう青年。人だかりの原因が、まさか自分だとは思わないが、もし天使ならばどうだろうか――。

的中した。原因ははっきりと青年にも分かった。彼の部屋が出火しているからである。

最初、何が起きたのか、青年には分からなかった。呆然としながらも、何かの使命感につき動かされて、乱暴に人ごみを掻き分けていった。

空っぽの気持ちにだんだんと、氷をのどに押し込むような拒絶の気持ちちがハリネズミのように突き刺さる。信じたくない、という気持ちちが心突き破り胸を汚していく。

「やめときな」

どこぞやの冒険者のような身なりの男がそういった。何がやめておけなのか。青年はすんでのところであつかりそうだったのを抑えた。

その冒険者の男は続けざまに言った。

「お前が命を落とすだけだ」

「……あの中には、人がいるんです」

青年は振り絞るように言った。一体何が彼をそこまで突き動かしているのか、青年にしか分からない。いや、青年にも分からない。

昔、似たような体験があって、そのときの後悔のせいで今自分が

激昂しているんじゃないだろうか。そんなことはどうでもいい。助
けたい。

「――あの中には、天使がいるんです」

「そうかい」

冒険者はそっけなかった。

「それで、そいつが助ける理由なのか？」

再度問われる。青年には、その質問が最初分からなかった。

中に人がいる。それだけで、中の人を助けるには十分な理由じゃないのだろうか。

「ここは思い出の街だ。誰もが誰も、自分の思い出に浸って生きて
いる。……意味、分かるな？」

意味なんて――。

「――いえ」

「分かるだろう？ つまりは、天使だかお前だか知らんが、ようはこ
れは、誰かの思い出だってこった」

「――分かりません」

「……ふん、思い出の中の事なんだから、誰も死にはしねえよ。大
方生きてるさ」

「――」

「でもな、いくら思い出だからといってな、思い出の部外者がそれ
に関わったら命の保障はねえのさ」

頭がじんじんする。肌を感じる炎が熱い。きっと中の彼女はもっ
と熱い。

頭の中が熱い。

何を言ってるのか分からない。分かるもんか。僕はお前の事なん
か、分かりたくもない。分かるもんか。

なんて冷酷なんだ。どうして見捨てられるんだ。どうして僕を見

捨てるんだ。

お前は僕の事を知らない。分かるもんか。僕がどうして彼女を助けたいかなんて分かるもんか。僕は彼女の為に絵描きを止めたんだ。守りたかったんだ――。

懐かしさに頭をやられてしまったようだ、と青年は思いなおす。

天使は、決して彼女じゃないのに。

「――すみません、それでも助けないと」

「……言つとくが」

冒険者はため息をついて、青年へと忠告した。

「彼女の思い出がもし死ぬ事だったら、彼女は死んでるぜ」

青年は振り返らなかった。歯噛みしながら、胃の下に積もって疼く不快感をため息に乗せて歩き出した。

そんなことは分かっているさ。

「…誰…ですか……」

「――」

むせ返りそうに熱い部屋の中、青年は天使の姿を見た。ドアノブが指に張り付いて痛かった。青年は手袋を持ってこなかったことを後悔した。

乱暴に天使を背負う青年。

どうしてこんな簡単な事が、あの冒険者に出来なかったんだろう。どうしてこんな簡単な事が、皆に出来なかったんだろう。

「……ああ、あなたですか」

か細い声が耳元からする。

「……どうして逃げなかったんですか」

青年は誰にも聞こえないような声で、呟いた。それでも、天使に

は聞こえたようで、彼女は返事をしてくれた。

「：他の人を逃がしていたら、頭がくらくら、して、倒れて、しまいました」

どうして。この天使にも出来るような簡単な事が、皆に出来なかったんだろうか。

「――生きていたか」

「――」

アパートから出てきた青年が浴びた一声は、まずはそれだった。敵意のこもった目線が彼に浴びせられる。何処か恐れているようにも、何処か迷惑そうにも、軽蔑しているようにも見える。

――ああ、そうか。別に天使の思い出じゃなくたっていいんだ。僕の思い出だっていいんだ。火事の思い出が僕の思い出だと、皆思っているんだ。

それはそうだ。僕が訪れた途端これだから。それでいいんだ。そうなんだ。僕の思い出なんだ。実は僕の思い出なんだ。助けられなかったのは、僕の思い出なんだ――。

「……まあ、誰も死ななくて良かったよ」

しらじらしい。

青年へ声をかける冒険者の声は、どことなくしらじらしい。

――何で皆助けてくれなかったんですか。

青年は冷えた頭で、冷えた考えをした。

――僕がどれだけ熱くなっても、貴方たちは冷たいままでしたよね。いつもそうでしたよね。まるで子供が駄々をこねているみたいに、困ったようにこっちを見て。関わってほしくなさそうに。

青年は、熱くなっていく考えを、冷えた頭で、それは冷たい目つ

きで。

熱くなっているのは自分だけだという矜持と、熱くなれない皆への軽蔑と、自分の正論が相手の正論に圧しつぶされる屈辱と。

青年は考えた。網目の粗い毛糸のネットに心をがぼりと注ぎ込んで、すべてすべて下に流して。

「――そうですね。良かったです」

網に引っかった言葉は心でぐずぐずになっていた。乱暴に絞ったそれを、冒険者だか野次馬だか、どうでもいい誰かに放り投げた。

「羽、焼けちゃいました」

「そうですか」

噴水のそばで、二人が会話する。意味のない会話だった。ともすれば昼過ぎの街の喧騒に消えてしまいそうな、そんな会話だった。

「――すみません」

「――すみません」

天使はきつと、僕の利き手の事を言っているのだろう。たしかにやけどしたけれども、絵は描ける。

僕は、何が言いたかったんだろう。僕が謝る道理は無いのに。

「……天使、失格ですね」

「そんなことないですよ」

僕は人間失格ですね。そんな言葉が、ふと青年の脳裏をよぎった。いや、別に失格のような真似はしていない。むしろ、彼女を助けるようと立派な事をしたじゃないか。結果が伴わなかったただけだ。お前は立派だ――。

「……知ってますか？天使って羽を無くすと天使じゃなくなるんです」

天使の口調は八つ当たりになかった。説明のように、自分でその

言葉を飲み込むように、きつい口調でそういった。

知ってるわけの無い情報を、知ってほしいといわんばかりの乱暴さだった。

事情も知らない青年が、そんなことないですよ、と適当に受け答えしたのだと思ったのだろう。

「――」

そしてそれは、適当だった。青年は彼女の為に危険を承知で助けに言ったのではない。「彼女」の為に助けたのだ。

正確には、彼女を助けたい自分の為に助けたのだ。
なんて適当なんだろうか。僕は立派じゃない――。

「私、もう空に帰れないんです」

「――」

「多分、もうこの街から出られませんね」

「――」

「……」

この街から出られない、と彼女は言った。この街は思い出の街。

この街から出て行かない人も多い。でも、彼女はかつてこう言った。

『つまり、貴方が帰るときに、元の世界になんら迷惑がからないようにしてあるのです』

これは、青年がこの街の時間が元の世界の時間とつながってるか聞いたときの言葉だ。彼女はそのとき、この世界で好きなだけ時間を過ごしても、元の世界では一秒もたっていないし、青年の寿命も減っていないと答えた。

その理由が、これだったじゃないか。

彼女は、思い出の街は元の世界に迷惑をかけないと言った。それ

なのに、彼女の羽はもう使えないのだろうか。元の世界に返れば、その羽は使えるのに。

彼女は、一体――。

青年はそこで考えるのを止めた。答えが出ない考えは好きじゃないからだ。その代わり、別の事を考えていた。

どうしてこの世界に人たちは、思い出に殺されるのだろうか。

『でもな、いくら思い出だからといってな、思い出の部外者がそれに関わったら命の保障はねえのさ』

冒険者はなぜ、こんな事を知っているのだろうか。そして、これは一体なぜなのか。元の世界に返れば、命は元通りだろう。

『彼女の思い出がもし死ぬ事だったら、彼女は死んでるぜ』

どうして自分の思い出でその人自身が死ぬのだろうか。それじゃあまるで、その人が元の世界で死んでいる話に聞こえるじゃないか。思い出が死ぬ事ってことは、その人は元の世界では死んでいるじゃないか。その思い出を繰り返しているだけじゃないか――。

噴水が水面を打つ音だけをこうこう繰り返している。頬をなでる風がやさしい。太陽は少し傾いて、肌をじりじり刺していく。ほのかな汗は涼しげな水と風にかき消される。

思考は固まらないはまだ。彼女は気をふさいだはまだ。

青年は悪い予感をぬぐうように、別の事を考えた。

こんな日はアイスクリームがおいしいだろう。日陰のベンチで寝転がるのも悪くない。ここでは好きなだけのんびり暮らせる。風を感じながら、ゆったりした時間を贅沢に過ごせる。心が疲れることもない――。

しばらくして、ようやく昼の活気が翳ってきた。先に口を開いたのは天使だった。

「――ごめんなさい、変な事言ってしまった」

「いえ」

青年は長い息を吐いた。今までの鬱蒼とした気分を吐き出すように。

そのまま長い伸びをして、少しでも現状を思い出して、天使を見据えた。

「それより、今日はどこに泊まりましたか」

「どこにしましょうかね」

「歩きながら探しませんか？」

まだ一日は長い。何かをするには短いけれど、何もしないには長い。

何かをしないと、何かを考えてしまう。せっかくこんなに穏やかな日だというのに。何も考えたくない青年は、しばらくの間二人で街を歩くことにした。

失われていく絵

「――贗作ですか」

青年は目の前の精悍な男に言った。改まったように座っている彼は、襟元をただしてうなづく。

「でもまあ、お互い合意の上の贗作なら大丈夫ですよ」

「――ご縁がなかったと言うことで」

一瞬だけ、空気が固まる。隣の天使が何事かとおもってちらりと顔を向けるのが背中越しにわかる。

「……そうですか」

男は嘆息しながら、カウンター席から腰を浮かせてコートを羽織る。ツケ払いしているところを見ると、どうやら常連らしい。夜は冷え込むからと、酒と一緒に飲まれた青年は火照った頬を冷ましがてらに、男を見送った。

この話は、危険すぎた。もしも自分の知ってる話だとしたら――。きびすを返して、カウンターの隅で丸くなってる天使の元へと向かった。彼女は何も言わずに、カウンターテーブルの木目を見据えている。

今日からこの二人は浮浪者デビューだろうか。モノクロ映画のワンシーンのような情景が、凍える夜の街にレトロの素朴さをにじませている。

「お客さん初めてでしょ」

「ええ、彼に連れられたばかりです」

床の軋みがひどくノスタルジーをくすぐる。マスターがグラスを洗いながら尋ねてきたのを、うわべ上機嫌で答える青年。

「中央に良い部屋の空気がなかったのでしょうか」

「僕は中央でやらかしてしまいました」

青年は苦笑しながら、火事を思い出す。

あれの原因が僕だと思われている間は、中央に戻ることはないだろう。戻りたくない。そこにいるだけで人に迷惑をかけるなんて、もううんざりだ――。

「失礼しました」

「いえいえ」

あくまで礼儀正しいマスターに、青年はぼんやり返事するだけ。ちょうど良く酔いが回って、何もかも忘れられそうだ。あの男の依頼は早く忘れてしまいたい。

「絵を描いてほしいのです」

男がそう切り出したのは、青年がカンバスを拾った後だった。

先ほどの火事が嘘みたいに鎮火したアパートに入って、拾えるだけ拾おうと思った青年と天使は、元のアパートの部屋から残りのカンバスを拾ったのだ。

聞くと、天使が用意したらしいこのカンバス、本来なら天使がいくらでも天から調達できたらしいが、今はここにある二枚だけ、ということだ。

絵を売って何とかしのぐと思うにも、二枚ではあまりにひどすぎる。それに、この火事の件で青年は白い目で見られている。

下手に絵を書くよりも、カンバス自体を売り飛ばしたほうが手っ取り早く思えるぐらいだ。

それならば、と南の方へと下って行った青年は、ちょっとだけ後悔した。

というのも、見た感じ治安がよさそうにも思えない場所で、路上に人が眠っているのも見えたからである。

明日はわが身、と覚悟を決めるにも決めあぐねた青年と天使は、とりあえずはできるだけにぎやかな場所へと足を進めて言った。そのときに、青年のキャンバスに目をつけて話してきたのがこの男である。

警戒しようにも金目のものがない青年は、ひとまず天使が乱暴な目に遭わないかだけを気にしながらも、男の話を聞くことにした。

「――贋作ですか」

男の話は非常にシンプルだった。贋作を作ってほしいというものはつきり言って犯罪行為である。

旅の恥はかき捨て、一緒に罪もかき捨てさ、などと適当なことを言える話ではない。

青年はそのあたりをそれとなく男に確認したが、男の話を聞く限りは、元々スラムの絵描きを使い捨てにしようとして立てた計画だという気配がした。

そのあたりをあやふやにごまかし、楽観的なことしか言わない。

……つまりはそういうことだ。

――本当にこの世界は良くできている。気が狂いそうだ。映画のリメイクはごめんだ。

「でもまあ、お互い合意の上の贋作なら大丈夫ですよ」

青年が聞かされた話は、市長のために絵を描けという内容だった。市長がどうしても欲しい絵があったが、その絵が高価だからと、贋作を所望しているわけだ。

男の話を聞く限りは安全そうだ。しかし、今から出会う人物が本当に市長なのかどうかもわからない。

何せマスターにもこのあたりが初めてだと悟られる始末――どうせこの街の市長なんか知らないだろう、と騙されている可能性は大

いにある。

そもそも胡散臭い話なのだから、疑うだけ疑うべきだ。

特に青年は、この台本に馴染みがある口なのだ。薄い感情の膜が
いびつに膨れ上がるのがわかる。

どう考えても、手に入れた贋作を本物と称して、どこかで詐欺を
行う企みだとしか、青年には思えなかった。

そうだ、どう考えても、そうなるに違いないのだ――。

「――ご縁がなかったと言うことで」

「そうですか」

詐欺師は往々にして、自分の仕事にぼろを出さないものだ。青年
の贋作がぼんくらな金持ちにでも渡ってしまえば、あとは絵以外か
らはぼろが出ないようになっていくのだろう。

もちろんばれたらそのときは、青年にすべての罪が被さってるに
違いない。詐欺師らは「偽者とは知らず転売した哀れな市民」にな
っているように。

途中でそのことに気づいて逃げ出そうにも、逃げ出せないように
閉じ込められているだろう。おそらくは、市長の家あたりに閉じ込
められるのだろう。

知っている。このままいけばどうなるか、その結論まで全部、青
年は知っていた。

針を手のひらで刺すような結末しか残らない。

「いいんですか？」

天使が尋ねてきたのは、確認の言葉。彼女からしてみたら、青年
が何である男の話に乗らなかったのか不思議だったのだろう。他に
食べる当てもないのに。

「良いに決まってる」

青年は断言した。もちろん理由があつてのことだが、青年はそのことを伝えて良いのかわからなかった。それでもこの判断に間違いはないと確信している。

「……そうですか」

天使は、何も質問せずに、ただ曖昧にうなずいただけだった。それが彼女なりの優しさだと知った青年は、それに答えるように、明日からはがんばろうと思った。

下手な場所で眠ると、身包みをはがされて打ち捨てられるかも、人身売買に会うかもわからない。

今彼らにできることは、絵の実力を売り込んでどこかに居候になるだけだった。それが無理なら、あるいは……。

一箇所だけ心当たりがある。あの老人の工房に泊めてもらおう。その代わりに工房を綺麗に掃除する、とでも言えば一泊ぐらいは面倒を見てくれるかもしれない――。

「ちよいと失礼しますよ」

しかし、突然の声で思考が中断された。ぞっとするものを感じた青年は、声のする方向へと振り向いた。

上品な初老の紳士。間違いない、こいつが例の市長だ。青年の懸念は確信に変わった。

真っ白のひげが特徴の柔和な顔つきで、いかにも物腰の低そうな男性である。その細い手には高級そうなステッキがある。

その顔つきに、青年は胃袋をねじ切りそうな暗い感情を覚えた。何でお前がここにいるんだ。お前とは会わないはずだったじゃないか。感情がいびつにねじれる。

「――待ってましたよ」

青年はやっこのことで、それでも顔には苦みを出さずそう答えた。自分の荷物を確認して腰を浮かせると、天使もそれにつられて立つ。このまま道中三人で散歩していると、こいつの手先にでも囲い込まれるのだろう。そうなる前に逃げよう。

青年はそう考えながら、紳士を見据える。垂れ下がった目の奥が、怪しい色をしているように青年は感じた。

――今こいつを殴れたらどれだけ幸せだろうか。こいつのせいで僕がどれだけ苦しいのか知ってるのだろうか。

奥歯をかみ締めながら、感情を殺す青年。天使の困惑の視線を感じる。まさか市長1人と言うわけじゃあるまい。今のうちに逃げ出さないと、こいつの手下に囲まれてしまう。わかっているのに。青年はほとんど本能で考えていた。いつカンバスをぶつけてひるませようかと。

しかし、その必要はなかった。マスターが後ろから射殺するような目で見てるのがわかったからだ。

ようやく青年は、逃げ場のないことを理解した。マスターにまで手回ししてるなんて、まったくの予想外だった。目の前の紳士が憎らしい。本当にふざけた話だ。やめろ。やめてくれ。

渴いて仕方ない口に、すっぱい味が広がる。せめて酸っぱさよりも、上手い言い逃れで口を満たしてほしかった。

「車を用意しましたので、どうぞお乗りください」
「いえ、結構です。宿を取っているので……」

「彼からお話を伺いましたよ。私の家にご招待しましょう」
「――」

まったく予想通りの展開である。もはや、ここから逃げ出すしかない。本当ならば、天使を早くどこかに逃げ出させておくべきだった。こいつは何も知らないままおしまいだ。

青年は体がかつと熱くなるのを感じた。泣きたいのか怒鳴りたいのかわからなかった。ただ、一つだけわかった。この世界は僕を馬鹿にして笑っている。

いや、違う、こんな話聞くべきじゃなかった。もっと前だ。火事になった時点で、天使なんか見捨てておけば良かったんだ。何でこんなのを拾ったんだ。何で僕は繰り返し返すんだ――。

何かが欠落していく。ビロードが僕を見る。僕にお似合いだと僕を見る。あれだけ綺麗な世界は僕をせせら笑ってる。

思い出の街外れにふさわしい、まっとうな人間外れの期待はずれ。

「どうかしましたか」

「――いえ、何も」

さっきから自分の感情がわからない。世界が僕を馬鹿にするって何だ？ 繰り返しして何が悪い？ もしあの時、彼女が助けられるなら助けたらどう？

……あの時？ あの時っていつだ？ 自分を覗き込むような天使を見ても、何も沸いてこない。

感情だけが引っかきだされて、記憶がぶちぶちと悲鳴を上げて、千切れていく。

自分のところにうずいている、先の見えない感情に整理がつかないまま、青年は呆然と歩いた。

逃げなきゃいけない。逃げなきゃいけない。

そう思っている足が動きそうもない。まるでおびえたように震えて、いきなり走り出すことなんか出来ない。

おしまいとわかってながら、おしまい以外のお仕舞いは、どんなお仕舞になるのか怖くて選べないのだ。

それとも、望むおしまいが来ないのが怖くて、自分でおしまいを選ぶのだろうか。

いや、もはや、おしまいを選ぶことに疲れてしまっているんじゃないだろうか。同じ結論が頭をちらついて僕をなじる。やい、弱虫。

青年はただ、大きな流れに引きずられるように、目の前の紳士についていくしかなかった。

自己破滅の願望としか言いようがなかった。僕は無意識のうちに僕を殺したいらしい。

失われていく絵、2

冷たい地面とのキスは、これで何度目だろうか。これだけで僕の心臓は怯えて早鐘を打ち、今にも過呼吸だ。

平衡感覚を時計回りにぐるぐる回転させて、人を普通の倍の長さに引き伸ばして、僕の心はげらげら笑っている。床だけだ。床だけが僕を笑わない。

僕の慟哭は、ペンキを石造りのこの家にぶっ放すように、血痕状に広がって、壁と言う壁をたたいてはじめて回った。全部僕の脳みそめがけてエコーになってくぐもって響く。

お前のせいだと罵って、脳みそから引きちぎっていく。
誰の声も聞こえない。

僕だけの慟哭の声で、ずきずきする全身を馬鹿でかい三又フォークで解剖されていくような、心臓を破いてみぞおちをくりぬいて胃を串刺すような慟哭が、それは馬鹿みたいに感情だけがシャワーよりしぶいてほとぼしって、電球を床にたたき付けるように割れ物の心を床にたたきつけて、心が破けて血が跳ねるさまをもっともっと叩きつけたくて、体の内側に巢食っているあああああああああ！をこっそり引っこ抜いて思いつき壁にたたきつけて僕は一刻も早くこいつを体から追い出して、腹の奥からあああああああああ！を押し流すように大音量で絶叫してのどの細胞が表面から一枚一枚えぐれてただれて僕は一刻も早くこいつを体から追い出してあああああああああ！を押し流して血がのどからあふれて足元から影が伸びてきて赤と黒が心臓の奥で掻き混ぜて僕は慟哭を慟哭を慟哭を。

子供みたいに叫んでた。僕は疲れてしまう。疲れている。

この部屋はつらくないし、僕の心を踏みにじらない。形は変わってくれない。三半規管は回らない。石の形は引き伸びないし、心は笑わない。天使はもういない。彼女の纏っていた懐かしさは僕の肌

を掠めもしない。

一緒にいた時間はしっかりしないし、彼女への思い出は何もない。彼女をかたどっていた僕の懐かしさは、僕の心からぽっかりとない。彼女との接点はない。

彼女の記憶ははっきりしないし、夜の寒さもしっかりしない。今見える色もはっきりしない。今見ているものもはっきりしない。きっと彼女は僕と同じものを見ていない。

僕は、僕には広すぎる石造りの部屋を、少しずつ僕にあうサイズに縮めていった。

意識がだんだんと小さくなるのがわかる。

僕が小さくなるのがわかる。

僕は目を瞑った。

眠った。

夢を見た。そいつは最悪だ。

それはざらざらにとがった、閃緑岩の黒光りする壁に、僕の幸せをありつけたけ、たわしの様にこすり付けている夢だ。

壁は磨かれ、僕の夢は泡を吹いてぶちぶちに千切れる。

お前は幸せかよ。

壁に張り付いた思い出を見て、僕はつぶやく。

僕の心から、好きなだけ思い出の泡を吸い取って、あの黒光りしますます綺麗になっていく。

僕はそれを見たくて仕方なくて、不毛に心をこすり付ける。

どうか僕の心にその綺麗な輝きをください。

知っています。

僕の心を一番台無しにしているのは僕です。でも、僕は僕がしたくて心をこすっているんじゃないんです。

心をこすらないと、生きていく糧が手に入らないんです。

お前をぴかぴかに磨かないと、僕は餓えてしまう。

「素敵な夢だったかね？」

返事のする気のうせるような声色で紳士がモーニングコールを尋ねてきたのは、青年が夢から飛び起きて息を整えているときだった。部屋には、カンバスと絵の具と、どこからか取り寄せたらしい絵の写真があった。下心が見え透いた配置だった。

小柄で落ち着き払った紳士は、澄ましたような言葉を語りかけた。
「君の絵の実力を試さないかい？」

その言葉は、端々から蛇のような狡猾さを匂わせていた。明け透けた悪意を咀嚼させるような、寒い上っ面の言葉だった。

どうせ贋作を描かないと、ここから出してくれないのだろう。しかし、描いたところで出してくれるわけがない。

命が延びるか縮むかの違いだ。天使も然り、どちらも助かりはしない。

石畳に横たえている青年は、顔だけを紳士に向けながらも、動かないままだった。もはや起き上がって作業に取り掛かるほどの気力はない。

こんな結果になる事だけは避けたかったのに。あの男の誘いを断った時点で、どこか遠くに逃げ出さなかったのはうかつだったのだろうか。

どうして、僕はこうも甘いんだ。せっかくやり直すチャンスだったのに――。

にじる音が聞こえる。自分の左手が踏まれていた。

「早くしてくれないかな？　生憎私に無限の時間はないんだ」

生憎お前に付き合う道理はないんでね。心の中で反射的に悪態が出る。

にじる力は次第に強くなる。もらすまいと決めていたうめき声と思わず出てしまう。それでも、いつその左手が潰れてしまったほうが後々僕にとっては救いになるだろう。

さっさと死にたい。それとも思い出の街では死ねないのだろうか。いや、昔に冒険家が、他人の夢に干渉したら事によっては死ぬ、と忠告してくれたではないか。

いつか逃げるように死ねるのだ。

これほど心を酷使したのは久しぶりだ。暗い意識の淵で目覚めることなく眠りたい。少し、しばらく、長い間、永遠に。

「！」

手の感覚が無くなったのが分かった。自分の体がゆっくりと砂のようにほどけていく。ようやく死ねるのだという安堵がやってくる。微細な粒を贅沢にこぼすように、自分の体は流れるような勢いで解けていき、色が抜けていくのが分かった。

自分の左手が透明な色になっていた。色素が砂のようになって地面へと広がっていくのが見えた。

明らかに狼狽している紳士を見て、意趣返しが出来たような気がして、一人ほくそえむ。

そのまま目の前のあいつを驚かせたい。そのためなら死んだっていい。僕の価値なんてそんなものだ。

やがて、髪から黒い色の砂が流れ落ちるのを感じて、僕の意識は、深く、ふかく。

胸をつつかえていた郷愁も鬱屈感も閉塞感も、全てが砂のように

さらさらと流れ出ていくようだった。

僕をかたどっていた、押し込められた倦怠感、風に流されてこの世界へと満遍なく散って行くだろう。

僕の心は限りなく広くなり、希薄され、純粹になって、透き通って、風のように抜けていくだろう。

何度も何度もろ過されて、自分と言う存在が、水のように実体のない形になって、誰かを取り巻いていく。

それほどに僕は純化されて、そのままかき消えてしまいくらいになった。

沈んだ氷のように形無く溶け出してゆく。浮かび上がる気力は無かった。

自分よりも、もっと切なくて広い思い出へと同化していった、そのまま僕をちびっこく収める境界線を指先でぽかされていくような感じがした。

きっと僕より遥かに透明で曖昧な僕の夢が、僕を曖昧に透明にしてゆくのだ。きっと僕は夢なのだ。

それでも、密度は水よりも高くても。

僕は僕を置き去りに浮かび上がってしまう。

僕は海底に沈んで行く。暗く深く青く透き通った海底から、光がゆらいで差し込む水面のプラネタリウムを見ている。

僕は引き上げられる。色が抜け落ちて透明になった僕は、海よりも軽くなってしまって、だんだんと浮かび上がっているのが見える。

僕のくたびれた服は水中をふわふわ漂って、僕はゆっくり沈みながらそれを眺めていた。

目の前に天使がいた。天使は泣きそうな顔で僕の手をつかんでいた。

僕はもっと奥にいるのに。

「ごめんなさい、わたしが――」

エコーが青いビロードにたゆたっている僕を包む。透明な僕は彼女に引き上げられていく。

グッバイ。

しばらくお別れだ。

そのまま僕は、自分がばらばらの気泡に分解されるのを感じた。きつといつかまたあうだろう。

下らない人生だった。下らない僕だった。

誰よりも透明だった僕を、くだらなくしたのは僕自身だった。

僕は僕に対して誰よりも透明だったのに、いつの間にか僕に対して全く濁ってしまっていた。

僕は誰かにこの濁りを取り除いてほしかったんだ。

ほら、僕の向こうにはあんなに透き通った僕がいる――。

僕は、僕が終わるのを感じた。

それは待ち望んだ最後だった。

白紙

「おお、よう来なさった」

人のよさそうな老人が、レンズを磨きながら青年を見上げる。白く膨らんだひげの下から、かろうじてその黄色い歯が見える。

老人は両手を広げて、こちらに来るように、と催促した。青年は老人に促されて歩いた。

「お前さんは随分つかれたようだ」

「――そうですか」

青年はぼつりと呟いた。手にはカンバスを持って、服装はくたびれた普通の服だった。

すけるような白い肌が視界からのぞき、生きている事を忘れさせるぐらいに希薄な光を帯びている。ぼうふらの様にうつろな格好だ。

「お前さんには、何が見える？」

「何、ですか」

思わず聞き返すことしか出来ない。抽象的な質問だったが、興味津々そうに老人は呟いた。何を期待しているのかも分からない、けれどもその質問は禅問答のそれとは違うニュアンスがあった。

老人の引き込まれるような深いビロードの瞳が、何かを諭すような表情を浮かべている。老人にも答えの出ない空白のページを、青年なりのインクで何かをつづらせるよな、テストするような雰囲気があった。

「ガラスがしゃべっています」

青年は手短にそう答えた。老人の用意した抽象的な質問よりも一層、青年は抽象的で曖昧だった。結局自分の内側に答えを見つけれずに、ただ今の感想を述べているだけだった。

自分の言葉に、青年は思わず幼児退行を思い浮かべた。

「ほほう……どのガラスかね」

ほっほっほ、とひげを小さく揺らして笑い、緩慢な動きでいすを降りた老人は、そのまま展示室へと向かってもう一度自分の作品を眺めている。

老人の作品はひどく魅力的で、どれもこれも動き出しそうなくらい柔らかな線で作られていた。

シャボン玉を吹く少女や、ウエディングドレスとタキシードの猫の夫婦、じゃれあっている犬と少年。

その作品はどれもがどれも、注ぎ込まれた芸術の胎動を内側いっぱいに脈打っている気配がした。

「どれでしょうね」

青年は自分の言葉に迷子になってしまった。目の前のガラスのほうが自分よりよっぽどしゃべるだろう、と青年は考えた。

「わしにも分からん」

老人は、そんな青年をみて優しく笑いかけるだけだった。

帰り道、青年は自分がひどく空っぽになった事を感じていた。自分の気持ちが霧散して、どこかへとちりぢりになってしまったかのようだ。

自分を形どっていた数々の要素が霧散して、結局今の青年は鈍くなっている状態だ。

決定的な何かが欠落した。そんな何ともいえない後悔がちらちらと鳩尾を焼いている。首筋の裏辺りにぞわぞわしたものを感ずる。不確定で曖昧な気持ちが、青年を陰鬱にしていた。

僕は、確か絵描きのはずだ。絵を描いて生活しているはずだ。恋人が居たはずだ。

そういった外の形ははっきり分かるのだが、中身が分からなくなっている。

僕はどんな絵描きで、どんな生活をしていて、どんな恋人がいた

んだ。

終わることのない自問自答は、やがて青年を広場へといざなった。ここで、誰かと話をした気がする。

噴水のきらめきを見て、青年は確信した。

この景色には見覚えがあったし、この景色には穏やかな印象がある。きっと穏やかな気持ちでいられたのだろう。

だが、明らかに僕は嫉妬していた。誰に嫉妬したんだろうか、どうして嫉妬したんだろうか。

そして、なぜか諦めがついて、この場を立ち去ったんだ。

どうして僕はそんなに廃れていたのだろうか。欲しがってばかりの子供よりも、いっそう質が悪い――。

「あ、絵描きさんですね」

自分よりも若々しい声がした。振り返ると、スカート姿の少女が小走りで駆け寄ってきた。

「こんにちは」

よそよそしい声だった。それは僕の声だった。

でも、向こうにはきつとよそよそしく聞こえてないに違いない。なぜなら普通の声だから。

僕にはこの声が自分の声とは思えなかったのだ。

「この前はありがとうございました！」

息を弾ませながら、勢いよく礼をする彼女。青年はふと、彼女に嫉妬したのだろうか、と考えをはせた。

「あの、お礼といっってはあれなんですけど……」

「ああ、お礼だなんて……」

「私のお店に来ていただけませんか？」

一瞬青年は虚をつかれた。そもそも彼女のことは知らない。自分のことを知るきっかけになるかと思って話をあわせていただけであった。

ところが話を聞けば聞くだけ分からなくなった。おそらく彼女に何かをしたのだろう、ぐらいいしか見当がつかない。

「お店？」

はい、と威勢の良い声をわきに、青年は彼女を観察していた。彼女の格好はせいぜい平民程度、裕福には見えない。それに、店を構えるほどの器量があるようにも思えない。

「私が働いている洋服屋なんですけどね」

「へえ」

「デザイナーが欲しいので、住み込みで働いていただけたらうれしいんです」

「デザイナー、ね」

「あの、火事のお話ですが……」

何かを慮るような彼女の様子に、青年はいやな予想を働かせた。おそらくは、火事で家を失った身なのだろう。この僕は。

そうやって視線を彼女に投げかけると、言葉に詰まったまま思いついてあぐねている様子が分かった。

「うれしい話だね」

青年は無難な言葉を選んだ。一瞬軽率だと思ったが、何も知らない今は流れに身を預けた方がいいだろう。

「本当ですか！」

青年の返事にうれしそうに答える少女。それにしても表情がよく動く人だ、と青年は考えた。彼女ぐらい

の年にしては、少々無邪気なきらいがある。この街の人に愛されて育ったのだろうか。

「オーナーさんとお話はしてあるの？」

「ええ、もちろんです」

「あとでその人に挨拶させてね」

「あ、分かりました」

「そこで話を聞いてから決めるよ」

「あ、ええ、そうですね」

青年は一応釘をさすことにした。まだ了解とは言っていない。彼女のそっかしさで、いつの間にか契約完了、となっては困るからだ。

流れに身を任せるとするのは、全部他人に預けるという意味ではない。流れをいくつか見て、それに身を任せていいかを判断する、という意味だ。

「道案内よろしくね」

「ええ、分かりました！」

「いやいや、今からじゃないよ。店も忙しいだろう」

「そんなに忙しくないですから、大丈夫ですよ」

「そうかい」

こっちです、と彼女は青年の手を取った。青年は半分それに引っ張られる形で歩き出した。

何かが彼の後ろ髪を引っ張っている。でもそれが何なのかは、青年には分からなかった。

分からないまま一步を踏み出す。いずれ、その感覚は失せていく。わだかまりとはこういうものなのだろう、と青年は自分に言い聞

かせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9152v/>

天使と絵描き

2011年11月13日15時36分発行